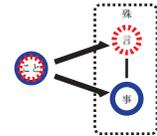
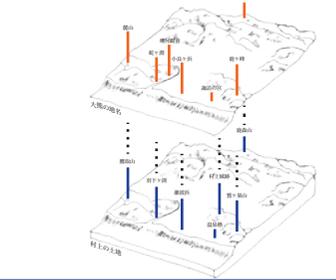
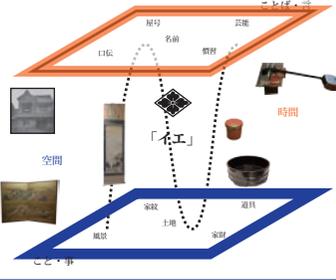


中上健次は「百年の晩業」の中で、その時間を検閲して、良いものとして昇華していた。平素を走りまわっている人と、時を止めた身に着きながら、平年の空間と時間を往還する中で昔かものように扱えらる。そしてその意を伝達するオリュウノオバという存在は、時間を超えてその輪廻を見つめ続ける存在である。この意味で、福島第一原子力発電所は、多岐に亘るオリュウノオバと捉えられる。熊野の見えない時間を超えて、歴史的に大熊町民の人を介している。

本計画は、大熊町民の心をつなぐのオリュウノオバをオリュウノオバに還元するものである。それはつまり、デザインを通して空間と時間を機軸的なものとしてとらえ直したための計画であり、分離された空間と時間を往還するための関係性のデザインである。



ことばと空間は、もともとの関係性が豊かのものである。その外にあらわれるものを対峙して、「ことば」は「こと」の機軸であるのに対して、「こと」は「ことば」の機軸である。



### フクシマの現在を身体化する

2015年1月13日、私はフクシマの現在を確認するため、現地へ赴いた。居住制限区域、4年前から時間が止まったかのように、無人の家々や風景は放置されている。

ゲートとスクリーニング場、放射能の閾値によって魅力的に定められた境界。安全神話という、科学技術への過度な信頼によって生まれた領域はある意味で聖域のようであり、そこで行われている除染作業は科学的な根拠の無い儀式的なものとなっている。

帰宅困難区域、避難防止用の柵が張り巡らされ、イエは生気を失っている。住み手がなくなった空間は、4年の時間を生き残りにいる。一方で、住み手も避難を余儀なくされ、空間に生きることができない。ここにおいて時間と空間の間にズレが生じているのである。



### 事故から4年後の現実として

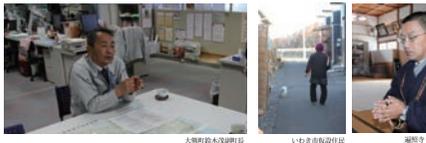
3名の方へのインタビューを通して、空間と時間の間に生じた亀裂に起因している問題が複雑となった。現実として、彼らの抱えている問題は以下にあげられる。

- 家族が散り散りになって住まなければならないこと
- 「イエ」に帰れない避難生活、地球や社会から浮遊してしまっている感覚にわかりが見えないこと
- 震災後に亡くなった方のお骨を代々受け継がれてきたお墓に納骨できないこと
- 町として古める空間を失い、町民から固定資産税をとれないため、町役場としての継続が難しい状況であること
- 「土地を失ったふさ」としての大熊は次第に風化してしまっていること

大熊町民の子たちと特設のレジョン  
一人熊野、5人（仮名） 一人大熊町、5人（仮名）

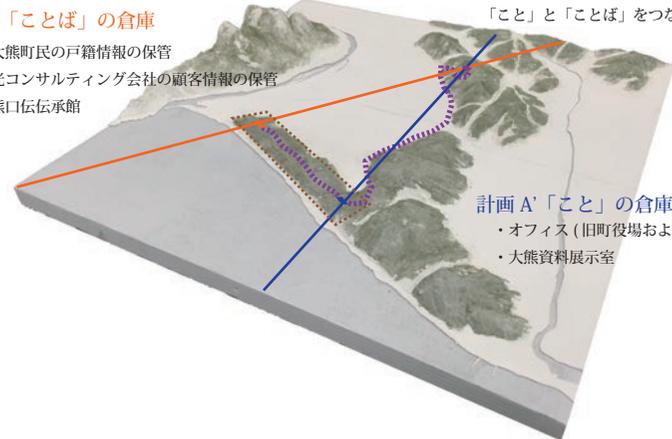
大熊町民の子たちと特設のレジョン  
一人熊野、5人（仮名） 一人大熊町、5人（仮名）

大熊町民の子たちと特設のレジョン  
一人熊野、5人（仮名） 一人大熊町、5人（仮名）



### 計画A「ことば」の倉庫

- 旧大熊町民の戸籍情報の保管
- 観光コンサルティング会社の顧客情報の保管
- 大熊口伝伝承館



### 計画B 3.11 お旅神事の計画

「こと」と「ことば」をつなぎあわせる儀式

### 計画A「こと」の倉庫

- オフィス (旧町役場および研究所として)
- 大熊資料展示室

### 苦麻川の民話からよみとる名前の構造



### 記憶の森

「こと」と「ことば」の倉庫をかこむ森には、いくつかの個性をもった樹が植樹される。それらはこの森で、長い年月をかけて育ち、口伝とともに大熊のひとたちを見守りつづける。



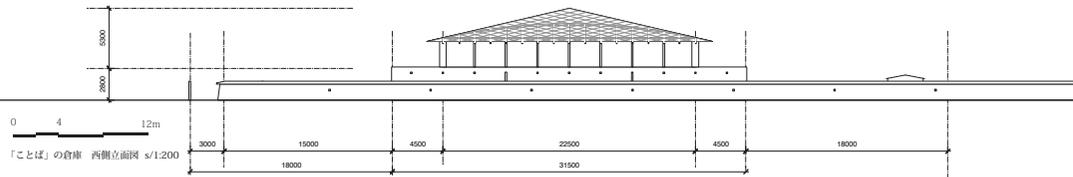
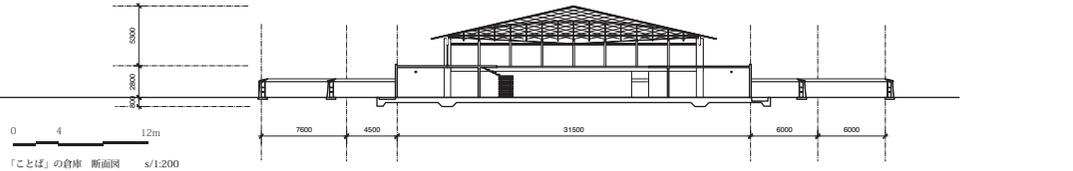
# 計画概要

あまりにも辛辣な現実と、私的ではあるが身に即した検証に基づいて、大熊町のポジティブなオリュウノオバの提案をする。失われた土地と時間との間を往還するための関係性の計画である。

100年、200年と時間がすぎるに従って、大熊の風景が風化していく一方で、行為が積み重ねられ、次第に風景として立ち上がってくる。



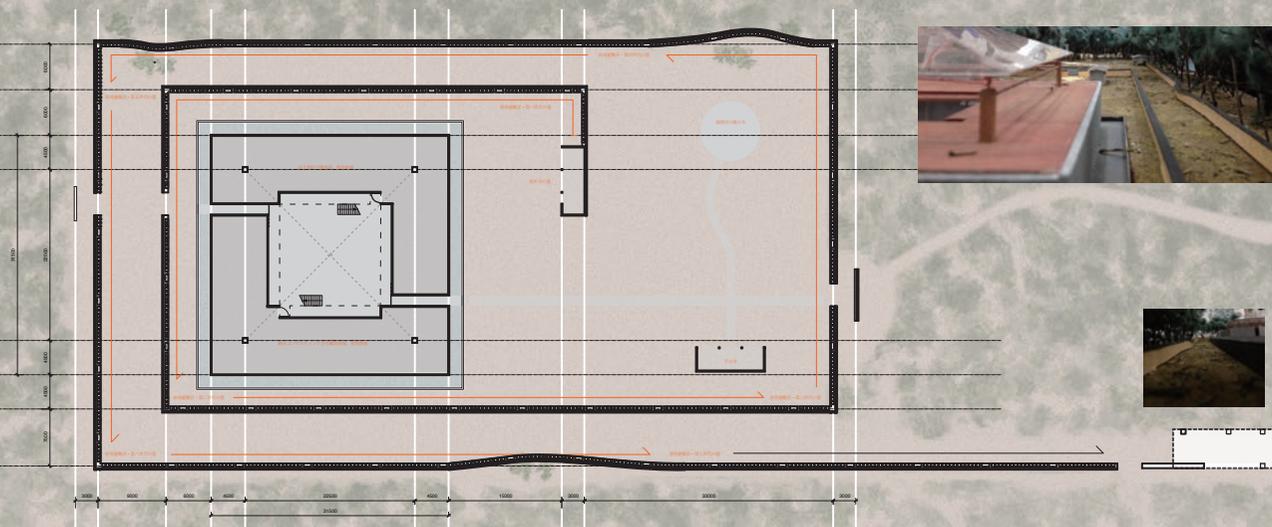
太陽の運行と時間の流れ



3. 熊川稚児鹿舞の引き継ぎ式「ことば」の倉庫にて  
追悼式を終えた参列者は、木々の間を縫い歩きながら、「ことば」の倉庫にいたる。  
熊川稚児鹿舞は10-14歳の長男4名が鹿役をつとめる。収穫品である熊川稚児鹿舞の衣装とかぶりものが、この式を通して次の世代の舞方に引き継がれる。

## 計画A:「ことば」の倉庫

1階部分には、観光コンサルティング会社の顧客情報や業務内容の保管倉庫、旧大熊町の戸籍情報の保管倉庫があり、2階は、大熊に関する口伝の伝承館として、そしてそれらを螺旋状に取り囲む垣根は、納骨堂の機能を併せ持つ。原発避難者の第一世代、第二世代、第三世代と、次第に垣根はのびていきながら、森との風景を形づくっていく。  
また垣根の内には、悠久の時間を共に過ごす森のための、枯れ木の墓を設計した。



観音けやき



万蔵ヶ池

垂れ栗



「ことば」の倉庫 1階平面図 s/1:200

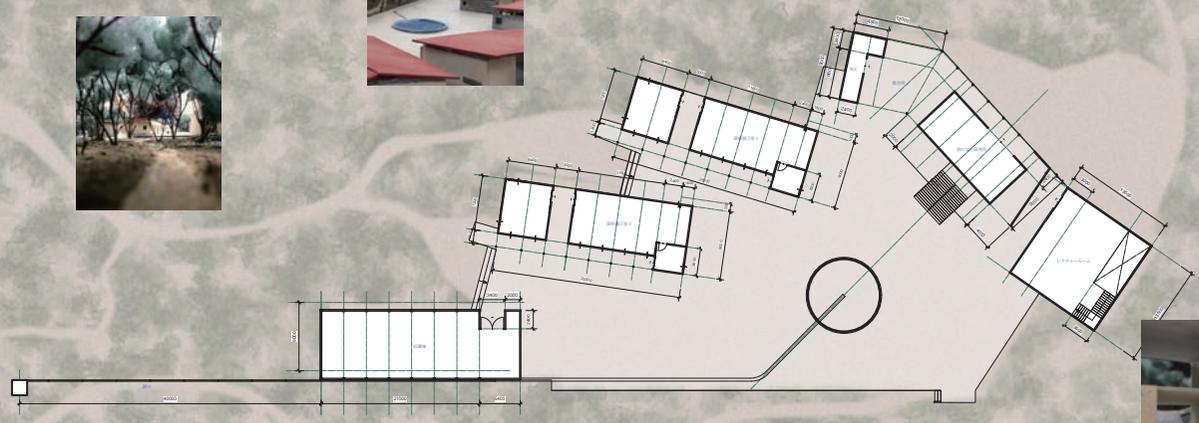
山腹の舞台にて、熊川稚児鹿舞の奉納。彼らが、この舞台から稚児獅子舞を奉納するその一瞬、時間と空間を越境した風景がここに現れる。それは悠久の時間を考えざるを得ない大熊の人たちだけが捉えられる風景であり、空間と時間を往還することによって得られる愉楽であるのではないだろうか。



温泉檜

天狗杉

2、記憶の森を通り抜けて  
 「こと」と「ことば」の倉庫をかこむ森には、いくつかの個性をもった樹が植樹される。  
 満開坊の桑の木、観音樺、垂れ栗の池、天狗杉、ベリーの椿並木、大熊のひとたちが何年かに一本、少しずつ植えていく。それらはこの森で、長い年月をかけて育ち、口伝とともに大熊のひとたちを見守りつづける。



計画A'：「こと」の倉庫

1 敷地には、観光コンサルティング会社のオフィスおよび研究所。  
 2 敷地には、大熊に関する資料の倉庫と展示室があります。所蔵品は、旧大熊町民が自分の家から持ち出した数少ない貴重なものです。長い時間の中で、継承することが難しくなったこれらの品々を管理していたことで、展示品とする。



0 4 12m  
 「こと」の倉庫 2階平面図 1/1,200